

第 21 回日本未病システム学会学術総会・シンポジウム 5・抄録

タイトル：鍼灸による認知症への対応～各種連携の中での認知症への取り組み～

所属： 学校法人後藤学園中医学研究所 所長 氏名： 兵頭 明

【抄録】

一、認知症に対する鍼灸治療の可能性をさぐる

認知症に対する鍼灸治療の可能性さぐるため、2009年10月31日に文部科学省戦略的基盤研究・社会連携研究推進事業の一端として開催された認知症国際フォーラムのテーマは、「認知症に東洋医学が挑む」であった。その際にパネリストとして中国から招聘された天津中医薬大学・第1付属病院の韓景献院長は、健康長寿の考えをベースにした脳老化と骨老化に対する鍼灸治療（韓景献方式：三焦鍼法）の効果について発表された。さらにアルツハイマー病と血管性認知症 435 症例の患者を対象とした鍼灸治療により、MMSE（認知機能検査）のスコアの改善、日常生活動作（ADL）の改善がはかられたことを報告された。

後藤学園中医学研究所は一般社団法人老人病研究会（認知症国際フォーラム開催機関）と共同で介護付有料老人ホーム舞浜倶楽部において施設連携、家族連携をベースとし、本人や家族の同意のもとで1名のアルツハイマー病の入居者、軽度認知障害の疑いのある2名の入居者に対して1年にわたって韓景献方式を実施し、天津とほぼ同等の効果を得ることができた。「所定の考え方を共有し、所定のトレーニングをつんだ者は、ほぼ同等の効果を出せる」という治療効果の再現性が実証されたのである。

二、各種連携のなかでの人材育成の取り組み

日本においても治療効果の再現性が認められたことにより、一般社団法人老人病研究会は2010年10月に第1回統合医療による認知症 Gold-QPD 育成講座を開講することとなった。昨年までに合計5回の育成講座を開催し、現在約100名近くの専門鍼灸師が在宅・入居施設・通所介護施設、治療院等にて多くの認知症の方のサポートを行っている。

超高齢社会の医療的・社会的ニーズに応えるべく、超高齢社会の大きな課題である認知症と高齢者不定愁訴の治療を視野に入れ、すべての高齢者に対して全人的・総合的なサポートができる人材の育成が急務であると考えられる。認知症に対する高度な西洋医学的知識を備え、東洋医学（鍼灸）の専門性を兼ね備え、そして認知症の方や高齢者への接遇介護法を身につけ、所定の鍼灸技能を実践できる専門鍼灸師の育成がスタートしたのである。

三、認知症に対する鍼灸治療の成果と今後の可能性

認知症専門鍼灸師をめざす研修生たちは在宅、高齢者入居施設、通所介護施設、鍼灸治療院等にて認知症の方、および多くの不定愁訴を訴える高齢者に対して鍼灸による全人的総合的なサポートを行っている。そこで求められるのは、施術環境の違いに応じた適切な対応である。本シンポジウムにおいては、医療連携、施設連携、家族連携をベースとして実践された数多くの症例報告にもとづいた一定の成果を報告する予定である。

認知症は現在の医学では治せないかもしれないが、鍼灸による全人的総合的なサポートによって認知症の方の人格の尊厳を守り、一定程度ではあるが認知機能の維持または改善、

周辺症状の緩和、ADLの改善、QOLの向上をはかることは可能だと思われる。